

元ラグーマン・経営者 立石 哲也の 体当たりインタビュー

塾経営者の立石氏が、会いたい先生に会いに行き、率直な言葉を投げかけ対話する「体当たりインタビュー」。今回ご紹介するのは、国際バカロレア (IB) の認定校として知られる開智日本橋学園中学・高等学校の井田先生です。生徒が「何を学びたいか」を考えると、進学先に、世界も、日本も視野に入ってくる。そのように言われる井田先生の真意とは？そして最後には、学校における管理職への独自の提言についても伺うことができました。

第二十三回

開智日本橋学園中学・高等学校教諭

井田 貴之 先生

井田 貴之先生 プロフィール

大学在学中から学習塾での指導を開始。中堅企業塾で小中高生の指導を経て、中学受験部門責任者として指導、運営管理まで経験。2016年春、共学化2年目の開智日本橋学園に勤務。2期生を中1から高3まで6年間担当。学年主任として生徒を送り出し、昨年より中1を担当しつつ広報部長として従事。



世界の中で、 たまたま日本に住んでいる というマインドセットが必要

大学卒業後、サッカーの社会人リーグに参加するために学習塾に勤務

立石 井田先生は、担任だけでなく管理職も経験されていますが、御校にはいつ着任されたのですか。

井田 開智日本橋学園が共学化されて、二年目に着任しました。二期生が入学した中学校一年の担任から始め、高校三年生まで担任を務めました。昨年度から、広報の担当をしています。

立石 社会人として最初から学校に勤務されたのですか。

井田 実を言うと学習塾に勤めていました。学生時代から続けていた個人塾から企業塾に移り、その学習塾で中学受験部門が立ち上がり、最初の責任者を担当していたのです。

立石 どうして、塾の先生から学校の先生になったのですか。

井田 学生の頃から教えることが好きで塾で教えていたのですが、同時にサッカーも生涯の趣味として取り組んでいました。卒業後も仲間たちと社会人リーグに参加をしていましたので、学校の教員になると部活の顧問などで時間的な制約があり、参加ができないことが多いと思いついて塾に勤務しました。ある程度、やり切ったことと学校から教員を誘われたので、学校の先生になりました。現在も地元の仲間とシニアリーグでサッカーを続けています。本校のサッカー部の顧問も担当していて、私自身サッカーから学ぶことが多かったので、生徒たちにサッカーを通して成長してほしいと思いながら顧問をしています。

立石 部活も結構ハードですか。

井田 開智日本橋学園は、部活は週4回までと決まっていますが、そこまでハードではないですね。週1回、屋上でフットサルだけ楽しんで参加する生徒もいます。

立石 御校で盛り上がっている部活は何ですか。

井田 1学年160人程度なので、他の学校と比較してもそんなに一つひとつの部活の部員は多くはないのですが、中でもダンス部と吹奏楽は部員が多いですね。ダンスの男子のパフォーマンスは迫力がありますよ。

立石 部活が週4回までだと他の取り組みができそうですね。

井田 開智日本橋学園では、部活以外にさまざまな取り組みをしています。例えば、国際バカロレア (IB) のカリキュラムの一環として S&A という、いわゆる奉仕活動があります。その流れでボランティア活動をやっている生徒や自分たちで独自の活動をする生徒も多いですね。また委員会活動も活発です。選択肢は、多数用意されています。

生徒への接し方、教え方が基本となる 国際バカロレアの教育プログラム

立石 国際バカロレアという言葉が出てきましたが、御校の国際バカロレアの導入について教えてください。

井田 2018年に国際バカロレア機構に認定をいただきました。認定されるまで、現校長の近藤が中心となって仕組み作りを行ってきたのです。5年に一度、国際バカロレア機構の方が更新のためにチェックします。そこで、授業の様子、

先生方へのインタビュー、生徒たちへのインタビューをしています。

立石 どういったインタビューなのですか。

井田 「この授業の狙いは何でしたか?」「授業を受けて何か発見はありましたか?」といった質問ですね。基本的には、大人も子どもも学び続けるというのが、国際バカロレアのコンセプトなので、そのコンセプトで授業、学校生活が実際に行われているかということがポイントとなります。

立石 一度、聞いたことがあるのですが、国際バカロレア加盟校の学費が高いという話を伺ったことがあるのですが。

井田 一般コースよりは学費は高いですね。ただ、開智日本橋学園の方針で学費はなるべく抑えようとしているので、他の学校よりは低いはずですが、しかし、国際バカロレアのカリキュラムを実施するには、設備、教員、その他にかかる費用が高くなります。その分、学費は高くなります。

立石 現在、グローバル教育は注目されていますが、他の教育法と国際バカロレアの大きな違いは何ですか。

井田 現在、日本で実施されているグローバル教育は、語学力を養うことや海外に留学できる制度があることではないでしょうか。英語を使う、英語で学ぶ学習が、コンセプトになっているかと思います。国際バカロレアの教育は、英語を使用して教えているイメージをお持ちの方が多いかと思いますが、英語ありきではなく、まず生徒への接し方、教え方が基本となっているのです。元々は、第2次世界大戦後に、どこの国に赴任しても世界水準の教育を受けることができることが始まりです。例えば、外交官が世界中のどの国に赴任してもお子さまが世界水準の教育を受けられるというイメージです。MYP (ミドル・イヤーズ・プログラム) では、各国の教育者のノウハウを集めて、それを体系的に言語化して世界共通のプログラムとしています。課題やテーマを決め、問いかけをする探究の授業にまで発展させていきます。DP (ディプロマ・プログラム) になると、英語で授業するので語学力が必要になっていきます。開智日本橋学園では、中学1年生から高校1年生まで学校全体で MYP を採用しています。高校2年生、高校3年生を対象とし、それまでに基準を満たしていれば、DP コースで学習できます。

立石 以前、御校に進学している生徒が DP コースに入るのが難しいと言っていました。何か特別な基準でもあるのですか。

井田 DP コースは MYP コースとは別物だと考えてもよいかなと思います。DP の最終試験を経て所定の成績を収める必要があります。DP スコアは世界共通なので、大学推薦基準を満たせば、面接と小論文で進学することができます。DP

の課程を修了するには、世界中のどこでも英語で学べるように、教材や授業が英語で実施されているので、誰でもウェルカム状態にはできないのです。

立石 全部、英語で授業を理解するのは難しいですね。どんな生徒が DP コースで学習できますか。

井田 帰国子女の生徒と中学受験から入学して英語力が一定以上の生徒が DP コースで学習しています。他の IB (国際バカロレア) 校で DP の生徒の修了率をホームページで記載されているのをよく見かけますが、本校は全員修了しています。

立石 全ての課題を英語で対応することは確かに至難の業ですね。大学進学も海外の大学を進学する生徒が多いのですか。

井田 今年の3期生 DP コースの卒業生は19名いましたが、海外大学に進学した生徒は12~13人です。

立石 多いですね!

井田 今年は多かったですね。昨年の2期生は DP コース12名中7名程度が海外大学に進学しました。今年の高校3年生、2年生の DP コースの生徒は20名程度いるのでその傾向は変わらないと思いますが、最近では早稲田大学、ICU (国際基督教大学)、上智大学などは DP のスコアで進学することも可能になってきました。

立石 帰国子女の生徒が海外大学進学に志望をするのですか。

井田 もちろん割合は多いと思います。しかし今年の6月に海外大学説明会を開催したところ、帰国子女の生徒ではない中学1年生、2年生が多く参加していました。

海外大学ありきではなく、 何を学びたいかが進学の基準

立石 海外大学への関心は高いですね。具体的に進路を決めるのも早いのですか。

井田 高校1年から2年に進級する際に、DP コース、国立大学、私立大学などにコース分けをいたします。高校1年の時に自分がやりたいことは何なのかを考えることから始まります。生徒には、漠然と海外大学に進学したいということはないように伝えていきます。自分がやりたいことが海外大学にしかないという場合は海外大学進学を視野に入れて取り組んでいきます。例えば、昨年の男子の卒業生で LGBTQ に興味があり、在学中にも女子のスラックス導入採用に向けて活動をしていました。その生徒の将来のやりたいことが、日本企業が人材を採用する際に LGBTQ の人も平等にフラット

に採用されるシステムを作りたいということでした。調べてみると、日本の大学では、そういう分野で学べる大学はまだなく、先進的に取り組んでいる国はオランダであるということがわかり、オランダの大学に進学しました。また、私が担任していた生徒は人間と動物の共生について学びたいと考え、進学する大学の候補に北海道大学、鹿児島大学、メルボルン大学、プリティッシュコロンビア大学が挙がりました。最終的には自分が学びたい専門性の高いメルボルン大学に奨学金をもらって進学しました。

立石 語学力を高めるとか海外の生活習慣を体験するというより何を学ぶかで大学を選択するのですね。日本の大学、海外大学で分けるのではなく、何を学ぶかで大学を選択することが大事ですね。

井田 本校の国際的な学びは、日本と海外の垣根を取っ払って将来を考えさせる事です。日本も世界にある一つの国で、たまたま日本に住んでいるというマインドセットが必要になります。今後、より多くの外国の企業が日本に進出し、それに伴い外国の方も日本に住む状況が予測できます。その時、本校の生徒が日本でも海外でも同じように活躍できる状態にしたいです。日本のことも学んで自分のことを語れるようにし、海外の方の文化や背景も理解しなければいけません。

立石 生徒たちに意識をさせるのも大変そうですね。

井田 本校の3分の1の教員は外国籍またはバイリンガルです。英語圏だけではなくて、ケニア、スペイン、南アフリカ

出身の方もいます。本校の夏期講習で、スペイン語講座やフランス語講座の特別講座を開講しています。その教員たちのお話が面白くて生徒だけではなく私たちも興味を持って参加しています。生徒たちは、いろいろな国々の教員と接しているうちに国際的な感覚を養っていますね。

立石 語学を学習するだけでなく、自然といろいろな国の文化も理解できるのですね。

井田 先日は、スペイン人の教員が「なんで、日本には昼寝の時間がないんだ？」と聞いてきたので、生徒、教員で昼寝が必要か、昼寝の効果はあるのかということを実際に議論をしたりしていました。学校中にいろいろな言語が飛び交っています。面白いことに、ボスニア人と日本人のご両親を持つ教員がいて、その教員の縁があって日本の学校では珍しいと思うのですが、ボスニアの高校と姉妹校になりました。今もカンボジア、シンガポール、インドなどのいくつかの国と提携しようとしています。

立石 1年単位での単位互換できる長期留学も可能ですか。

井田 国際バカロレアのMYPプログラムは、学校内で実施するカリキュラムが多いので時間的に難しいのですが、先ほども申しましたように外国籍の教員と帰国子女の生徒が多いので、通常の学校生活で異文化コミュニケーションを図れます。留学に関しては、1か月から2か月の短期留学を実施しています。

立石 元々、英語を話せる帰国子女の生徒や中学から英語を

本格的に始める生徒がいるので、バリエーションが豊かだと思うのですが、生徒同士のコミュニケーションはどうですか。

井田 英語の授業は帰国子女クラスと中学受験組で分れていますが、それ以外は全て一緒に行動しています。英語が苦手な生徒が帰国子女の生徒に教えてもらったり、逆に帰国子女の生徒が数学を得意な生徒に教えてもらったりして、各人の長所を認めてお互いに成長しているようです。物理的にも狭い校舎なので、自然と教員、生徒同士の距離も近くなってきます。

「哲学対話」の2つのルール、算数と数学の違いとは？

立石 お互いが認め合わない、なかなか成立しないですね。大人でも難しいです。

井田 開智日本橋学園は、「哲学対話」という授業を大切にしています。簡単に言うと「他者との違いを認めよう」という教えです。その授業には2つのルールがあります。1つは、他の人が話している間は必ず聞く。もう1つは、他の人の意見を絶対に否定しない。この2つだけです。答えのない問いを教員がファシリテーターになって、問いに対していろいろな考えを聞きます。また生徒がしっかりと発言できるような心理的安全性を担保できるような文化を作り出しています。その土台があって主体的にチャレンジすることができるのです。

立石 先生は数学の先生と伺ったのですが、小学校の算数から中学校で数学という科目になりますが、大きな違いはありますか。

井田 私はよく保護者に伝えるのは、「答えだけ出ればいいのが算数、説明するのが数学」と伝えていきます。

立石 そうですか、私は逆だと思っていました。

井田 数学は、他者に自分の考えたプロセスを誰もがわかるように説明するのが数学だと考えています。この考え方が定着すれば、高校数学で置いていかれることはないと考えています。

立石 うちの塾でも高校数学についていけなくて通っている生徒は多いです。御校の数学のカリキュラムは先取りですか。

井田 先取りですね。公立中学校3年間で指導する内容を2年間で終わらせます。

立石 ついていけない生徒はいますか。

井田 教え方だと思います。やみくもに早く進めてもついていけない生徒は出てきます。まず、大学受験までに必要な学

習を逆算して考えます。その中で、無駄を省いていきます。例えば、1次方程式なら連立方程式、因数分解、2次方程式までのカリキュラムでどこが共通しているか、どこが違うかを明確化します。そうすることによって生徒の理解度も変わってくるかと思えます。

立石 確かにそうですね。私立用の教材だと、「代数編」、「幾何編」と分かれているので無駄がないですね。公立中の教材だと、中学1年で1次方程式を習ったら、次に方程式が出てくるのは中学2年の連立方程式なので1年間空いてしまっています。最後に。先生はどんな先生になりたいですか。

井田 一度、学校にも提案をしたことがありますが、校長や教頭という管理職を55歳定年にして、55歳を過ぎたら、再度中学校1年の担任になって現場に戻って教える制度を作りたいですね。

立石 それは面白そうですね。

井田 私自身は広報部長を務めていますが、無理を言って授業をさせていただいています。一度、管理職になってから担任を受け持ったり、授業を実施することで新たな視点を獲得する機会にもなります。生涯、生徒たちと接していきたいですね。

【取材後記】

開智日本橋学園中学校は、偏差値も確かに高い部類に入るとは思いますが、それ以上に、入学してから“覚悟”が必要な学校だと感じました。その覚悟は、グローバルな人材になり、世界貢献のできる人材になることの覚悟です。志望校を決める際に、大学進学実績から選択する受験生、保護者も多いかと思えます。そこで、グローバル市民になれるかどうかという「新しい物差し」を取り入れた学校と言えるでしょう。学校生活では、いろいろな課題に挑戦して、そこで試行錯誤することが、生徒の将来の夢や職業につながるかもしれません。この可能性に満ちた生活は、生徒たちにとって貴重な財産になることでしょう。正解のない時代だからこそ、開智日本橋学園中学校のような学校は必要だと確信しました。

立石 哲也 プロフィール

1975年生まれ。市川学園、中央大学卒業。教育関係の会社に就職。2012年、36歳で個太郎塾北赤羽教室を開業。2021年5月より浅草教室の運営も手掛ける。教室経営の傍ら、「子どもたちに幅広い選択肢を！」という想いから、首都圏模試で個別指導EPPリーダーとして活動している。



開智日本橋学園中学・高等学校教諭 井田 貴之 先生 思考コード

| | 先生としての取組み A | 学校としての取組み B | 生徒の成長 C |
|----------|-----------------------------------|---|--|
| 3 | どの立場、何歳になっても教壇に立ち続ける。 | 6年間の学校生活を通して、グローバルな視点を持たせる。 | 中高で身に付けた語学力、考え方を基に世界基準を自ら作れるような人材になる。 |
| 2 | 6年間誰一人、数学についてこれない生徒を作らないカリキュラム作り。 | IBのDPカリキュラムにおいて、どの科目でも英語で学べる環境を作る。 | 大学進学を日本、海外の大学を問わず、自分の専門性を高められる大学を選択する。 |
| 1 | 算数と数学の違いを生徒に実感させ、数学の魅力を伝える。 | IB(インターナショナル・バカロレア)のMYPカリキュラムを通して生徒に多様性を養わせる。 | 身に付けた多様性を通して、自分の得意なものを見つける。 |